

アン基金通信

<http://members.jcom.home.ne.jp/ankikin/>



【事務所】

〒113-0033

東京都文京区本郷 1-10-13-302

TEL/FAX 03-5840-9515

E-mail ankikinp@royal.ocn.ne.jp

特集 「こどもがのぞむ社会的養護を考える大会」

1. 「こどもがのぞむ社会的養護を考える大会」特集によせて
(日本女子大学 和泉広恵)
2. 当事者が語ること・当事者の声を聴くこと (東京大学大学院 野辺陽子)
3. こどもの立場と職員の立場を両方経験して
(なごやかサポートみらい会長 清水真一)
4. こどもたちの声から社会的養護をふりかえる (元児童養護施設職員 渡邊悦子)
5. 「言葉にはならない気持ち」を共有して (里親家庭の実子 山本真知子)
6. アン基金 P からのお知らせ

I : 里親研修報告

1. 「こどもがのぞむ社会的養護を考える大会」特集によせて

(日本女子大学 和泉広恵)

今回のアン基金通信は、12月12日-13日に日本女子大学で行われた大会について、特集号を組むことになりました。この大会は、年賀寄付金の助成金の交付を受けてアン基金プロジェクト主催で行ったものです。具体的な内容や大会の感想については、他の記事に譲りますので、ここでは、開催に至った経緯について、私から少し説明をさせていただきます。

この大会を企画するきっかけとなったのは、一昨年の浜松で行われた全国里親大会でした。浜松では、何百人もの聴衆を前に壇上で自分の意見を語る4人の青年がいました。彼/彼女らはみな、里親家庭

で育ったさくらネットワークのメンバーでした。4人の発言はそれぞれに自分らしく堂々としており、聴いている私たちを圧倒するものでした。こうした青年をみたアン基金の里親理事は、「せっかく子どもたちがこんなふうに発言をするようになったのなら、子どもが意見や知恵を出し合い、日本の児童福祉を変えるきっかけになるような討論の場がつかれないかしら」と夢舞台を見るような目で語り出しました。こうして、この企画がスタートしたというわけです！

私たちは実行委員会を立ち上げ、半年間準備を重ねてきました。そこでは、“当事者”が語ることが前

提だが、それは里親家庭に委託された子どもだけでなく、実子もぜひ入るべきだ、施設を出た子どもも入ってほしい、それを受け止める大人も参加してはどうか、などの意見が出ました。また、大勢の聴衆の前で話すよりもくつろいだ雰囲気ですべて「当事者」だけで議論ができる方がいいという提案も出されました。議論を重ねた末、大会当日のようなスタイルとなりました。

なにしろ初めての試みであり、実行委員会や事務局の体制は隙間だらけでした。実行委員長である私の力不足もあり、多くの方々にご迷惑をおかけしてしまいました。このことは、今後の大きな課題です。

ただし、この大会で私自身がたったひとつ心に決

めていたことは、なんとか達成できたようですので、何よりも私はうれしく思っています。それは、会議への参加を承諾してくださった人々に「来てよかった！話してよかった！」と言ってもらえるような会にしたいということでした。これは当たり前のことですが、大会の内容を考えると、決して簡単なことではありません。しかし、そのことが児童福祉にかかわっている人々の心を動かすと信じていました。

昨年は大会を開催するために突っ走ってきたので、里親理事やお忙しい皆様に多大なご負担をおかけしました。すみません。そして、みなさんとこのように新しくわくわくするような試みを実行する機会をいただいたことに、心から感謝致します。

2. 当事者が語ること・当事者の声を聴くこと

(東京大学大学院 野辺陽子)

「自分も当事者だったんだ！」

これは円卓会議に参加したある実子さんの言葉です。12月12日・13日に日本女子大学で「こどもがのぞむ社会的養護を考える大会」(以下、大会)が行われました。12日には児童養護施設の職員、児童自立支援専門員、里親、児童養護施設出身者、元里子、養子、(里親家庭で育った)実子が一同に集まり、自分が経験した社会的養護についてざっくばらんに語る円卓会議が行われ、13日には児童養護施設と社会的養護で育った海外の青年2人が当事者ネットワークの現状について講演するシンポジウムが行われました。私はアン基金の事務局で大会への申し込みや問い合わせを受けましたが、児童相談所の職員の方や児童養護施設で現在働いている、あるいは過去に働いていたという職員の方からの申し込みや問い合わせも多く、子どもを育てる立場の方の大会に対する関心の強さを感じました。

この「こどもがのぞむ社会的養護を考える大

会」には2つの点で非常に大きな意義があったと私は考えています。一つは「当事者が語ること」であり、もう一つは「当事者の語りを聴くこと」です。

「当事者」とはいったい何でしょうか?『当事者主権』(岩波新書)によれば、誰でもはじめから「当事者である」わけではありません。何らかのニーズを自覚し、声に出してニーズの充足を社会に要求したときに初めて人は「当事者になる」といいます。現在の社会のしくみと自分が合わないときに、人は社会ではなく自分自身にネガティブなレッテルを貼ってしまったり、あるいは現実的な不利益を負ってしまったりすることがあります。声を出してニーズを要求して社会のしくみやルールが変われば、いま問題であることも問題でなくなる可能性があります。しかし、ニーズを要求する前に、そもそも自分のニーズが何であるのかを自覚することさえそれほど容易ではありません。なぜなら、ニーズの原型である「何かお

かしい」というかすかな違和感や居心地の悪さは、それを言葉にして他者に伝えようとする時に、「気にしすぎだ」「甘えている」「わがままで」という他者の反応や、あるいは他者の反応を先取りして「こんなこと言ってもいいのかな」と躊躇する自分自身に直面する可能性があるからです。このようなニーズ以前のもやもやとした違和感は一人で語り出すことができません。語りに耳を傾けてくれる人や場があって初めて安心して語りることができるのではないのでしょうか。その意味で、冒頭に書いたある実子さんの「自分も当事者だったんだ!」という語りは「自分の気持ちを率直に語ってもいいんだ」という気持ちになれる場所をこの大会が提供できたことを意味していると私は考えています。

次に「当事者の語りを聴くこと」です。当事者と非当事者が「社会問題らしき」「ニーズらしき」テーマについて触れる時にはしばしば緊張が伴います。当事者が話す／話さないということには、①気にしているから言う、②気にしているから言わない、③気にしていないから言う、④気にしていないから言わない、ことが考えられ、非当事者側が当事者に尋ねる／尋ねないということには、①気にしているから聞く、②気にしているから聞かない、③気にしていないから聞く、④気にしていないから聞かない、ということが考えられます。このように多様なケースが考えられるため、相手

の気持ちの読みあいが双方で始まれば緊張が発生します。ある元里子の方は私に「相手に気を使わせるのが嫌なので里子であることについて友だちには言わない」と語ったことがあります。非当事者のほうでも何らかの「遠慮」をして当事者にそのテーマについて触れないことがあります。この大会によって少しでもこのような空白部分に対する理解が深まったのならいいな・・・と考えています。

もちろん、「当事者の語りを聴くこと」には良い面だけがあるわけではありません。聴き手の枠組みによって、話し手の意図がそのまま伝わらないということもありえます。日常のコミュニケーションの場面でも、話し手の意図が意図した通り100%正確に聴き手に伝わるということは稀かもしれませんが、今回の大会での当事者の語りも当事者の意図とは離れて人々に引用されていくかもしれません。しかし、子どもの視点、育てられた者の視点の一端を知ること、大人あるいは親の視点を相対化する機会を得られたことを私はまずは喜びたいと思います。今後、この大会がまた芽がどのように育っていくのか楽しみです。



3. こどもの立場と職員の立場を両方経験して

(なごやかサポートみらい 会長 清水真一)

「こどもがのぞむ社会的養護を考える大会」に参加させて頂きありがとうございました。参加者の打ち合わせは2回で、初めてお会いする方、いつもお会いしている方などが集まり、この大会をどのように進めていくかなどを話し合いました。

色々な立場の方がいて話がきちんとまとまるかちょっと心配をしていましたが、「あまり難しく考えないでみんなが気楽に話せる場を作ろう」「最終的に結論を出してまとめるわけではなく意見を言い合おう」と考えました。

1日目の円卓会議では施設で育った方、里親家庭で育った方、里親家庭の実子の方、里親の方が参加をしました。元里子の方からは里親家庭で育った時のお話、里親の実子の方からは実子の立場でのお話、里親の方からの里親としてのお話がありました。現在施設で働いている職員の方も参加して合計14名で円卓会議を行いました。

自分は施設での生活経験しかないため、今回このような大会に参加させて頂いたことで、里親制度のことや里親について現状を知ることができました。施設についてはよくわかっているつもりですので、今後は里親のことについて制度などを自分で勉強していくことが必要だと認識させて頂きました。

施設で育った方からは、施設生活についての話などを聴くことができました。自分は施設で育ち、現在は施設職員をしていますので、施設で育つ子どもの立場と施設職員の立場の両方の視点で1日目と2日目にお話をすることができました。



この大会を通して、たくさんの方と出会い知り合うことができました。今後も色々なところで繋がっていくことと思います。また、里親の実子の方など、主催者のNPO法人里親子支援のアン基金プロジェクトの方やこのアン基金プロジェクトのお手伝いをしている方の中で、自分が施設に入所している当時、日本福祉大学の学生さんでボランティアに来ていた方に10数年ぶりに偶然再会することができました。最近までは東京都内の施設で仕事をされていたようですが、結婚されて愛知県へ戻られているようでびっくりしました。これも何かのご縁だと思っています。その方から「みらいの活動に協力しますね」と言って頂きとても嬉しく思います。

この大会に参加させて頂き多くの事を学び、たくさんの方に出会えたことは自分にとって大切な財産だと思います。なごやかサポートみらいは2010年9月21日で2周年を迎えます。2周年記念講演会を9月5日(日)名古屋で開催することが決定しました。記念講演会と今回のような大会をミニ大会として開催できればと思っています。

4. こどもたちの声から社会的養護をふりかえる

(元児童養護施設職員 渡邊悦子)

開会式は、全国から送っていただいたメッセージ折り紙の輪飾りを参加者の子どもたち等に持たせていただき、大講義室を児童養護施設で暮らしている児童の作った曲にあわせ行進して、大きなひとつの輪につなげる温かなスタートが印象的な大会だった。

今回の新しい試みとして、別教室にて、社会的養護のなかで生活を築いてこられた、養子縁組を経た里子、養育家庭を経た里子、里親家庭の実子、

児童養護施設を経た施設児童が社会人となり、親となった方々が振り返り、子どものころ思ったこと、感じたことを語り合う場を設定した。この場には、司会者の大学の先生、里親、施設職員も1名ずつ参加をしていた。この内容を私たち参加者は、ビデオカメラを通して映る教室の様子を大講義室スクリーンで視聴する参加方法であった。参加当事者の方々は、カメラに映ることに違和感を感じていたものの、思ったより話しやすかったと

の最後のコメントが聴かれ、今後も継続し工夫が可能な方法と感じられた。

私も児童養護施設の職員として10年以上働いていたこともあり、施設出身の方々の声を聴いて改めて施設間格差を感じた。近年また増えつつある男女別棟の施設、そのための兄弟間は同じでも、男女のきょうだいや子沢山きょうだいでは、同施設であっても別棟ということは考えられる。当事者の方からは、きょうだい観が育てられない環境で育まれたことへのきょうだい関係の希薄さへの意見が出された。

私の従事していた施設は、地域社会にある1軒屋の2階建てグループホームであり、男女混合、縦割りの6名グループだった。このホームは、3人兄妹を別の施設から施設変更し、兄妹観を育む環境を児童福祉司が提供をしたいという希望と重なり、新たに始めるホームのきっかけのひとつであった。

職員として働きながらきょうだい観をどのように育むのか？は、私たちの課題のひとつであった。当事者の方々も施設職員ともっと自分のこと、きょうだいのこと、両親のことを一緒に話し合い、意見を交わせる環境があれば、もっともっと違う方法や捉え方が育まれたのかもしれない、とひとり考えた。

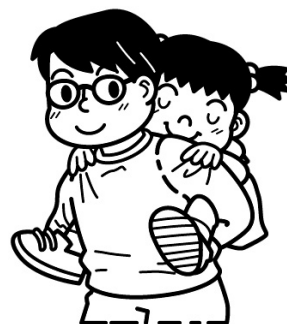
今回は里親を希望した実子の参加もあったことが、劇的にすごい！と私は興奮した。彼女たちは、里親希望の親のもと、それなりに意見を聴きいれてもらい生活を送っていたが、自分と年齢が近かったり、同性であることでかなり苦労をしていたことを語ってくれた。どの子どもたちも安心して、ゆったり生活を楽しむためには、実子との年齢差を考慮した環境を提供することが大切であることを改めて認識させられた思いがした。

二日目午前には大講義室にて、アイルランドと

ケニアで社会的養護のなかで育まれたが、現在はソーシャルワーカーとして働かれている海外からの2名の方々の生き立ちや仕事内容を聴いた。同じような境遇のもと英語にて語られる姿や声を聴く経験は、子どもたちにとってとても大きな素敵な体験だと感じられた。現在施設で育まれている多感な中高生たちにも聴かせてあげたい！そんな気持ちを職員の友人と語り合った。

午後にはシンポジウムが行われた。施設養護への批判もいわれているが、現在の児童養護施設は、臨床心理士や精神科ドクターとの連携、ファミリーソーシャルワーカーと児童相談所の児童福祉司以外にも、その手前で多くの社会資源を用意しつつチームでケアに取り組んでいる。どの子どもたちにも安定した環境を提供するためには、里親家庭のみではとても大変な条件の中での子育てを行っていることと思われる。里親のもとで生活をする実子は様々な苦難を乗り越えようとがんばる両親を見続け、考え成長されてきたのだと思う。誰かだけががんばる世の中から、皆で手を取り合って、支えあって、協力をし続ける社会環境を同時に育む努力が必要だろう。

子どもの声を聴くことは大変かもしれない、難しいかもしれない。でも、当事者であり、その人自身の生活環境を組み立てる主人公には、しっかりと声を聴く必要があるだろう。



いずれ同じ大人となり社会の一員として、発言に責任をもち、担っていく宝なのだから。

5. 「言葉にはならない気持ち」を共有して

(里親家庭の実子 山本真知子)

H21.12/12.13に日本女子大学目白キャンパスにて「こどもがのぞむ社会的養護を考える大会」が行われました。

1日目は社会的養護に関わっている方(元里子・養子・児童養護施設出身者・里親家庭の実子・施設職員・里親)がいろいろなことを語り合う円卓会議を行いました。この円卓会議は別室で行われ、大勢の方がいらっしゃる会場へ中継するという方法で行われました。2日目は午前中に海外のゲスト2名から海外での社会的養護のお話をいただきました。午後は前日の円卓会議・午前中の海外ゲストのお話を受けてシンポジウムを行いました。

私はこの大会の実行委員として微力ながらお手伝いさせていただくことができました。実行委員としてお手伝いをと声を掛けていただいたときからとてもわくわくする会議だと思っていました。準備段階から当日の大会をやり終えて本当に大きな意味のある大会になったと思っています。大会で私は1日目の円卓会議・2日目のシン

ポジウムでメンバーとして発言する機会をいただきました。2日間を通じて自分自身が大きく変化することができました。



私は小学校1年生の時から両親が里親養育

を始め、里親家庭の実子として育ちました。里弟や里妹と成長する中でいろいろなことを考え、悩んでいたときにアン基金プロジェクトの方々がそっと傍にいてくれたことが今の私を支えてくださっていると感じています。

日本では里親養育というと里親と里子の一対

一の関係だと思われることが多く、実子がいることもご存知ではない方が多くいらっしゃいます。また、実子自身も社会的養護という言葉の中には自分たちは含まれないと思っているので里親大会やその他の大会にも足を運ぶことも少なかったと思います。今までは一対一の里親と里子の関係だけで里親家庭全体(実子・他の里子・養子・祖父母など含む)の関係を考えていくことがあまり重要とわれていませんでした。そんな中でアン基金は里親家庭全体に早くから目を向けてくださり、今回の大会で日本では初めて里親家庭の実子として大勢の方の前でお話することができました。発言はあまり慣れていないのでうまく皆さんに伝えられたかどうかわかりませんが、とても充実した2日間でした。

また、児童養護施設出身者の方や元里子の方などと円卓会議を囲むことができたことは人と人のつながりを新しく作ることができ、育った環境が違っていても同じような気持ちを持っていることに驚いたと同時にとても嬉しく感じました。施設・里親家庭によって全く異なる生活環境であるけれど、言葉にはならない気持ちがあるということは同じだということがわかりました。この円卓会議を通じて横と横のつながりを持つことの大切さを感じました。別室で行われた円卓会議では緊張感とメンバーの思いやりが沢山詰まった会議だったと思います。事前の打ち合わせも含め、同じ時間を共有できたことは本当に大きな出会いでした。メンバーとのつながりができたことだけでも参加することができてとても感謝しています。

2日目の海外ゲストの講演も世界の中の日本がどのような状況なのかを理解することができました。日本の児童福祉はどうすればより良くな

るのか、今までの日本の歴史と世界の社会的養護に目を向けて、これからの未来を考えていくべきだと感じました。

数年先に「この大会をやったことが今につながっている」と多くの皆さんが感じられるように、この大会を終えたことをゴールにするのではなく、スタートとしていきたいととても強く感じています。そして、この大会が1回で終わることなく、2回・3回と続いて行くことができればと願っています。

家庭や家族ということは人によって全く異なる概念だと思いますが、施設や里親、養子などを含め子どもたちが「私には家族がいる、一人ではない」と心から思える社会になる一歩として、この大会を作り上げられたことが良かったと思えるように、これから一つ一つ大切に歩いて行きたいと思っています。

会場に足を運んでくださった皆さんに、そして温かいコメントをいただいたことに円卓会議のメンバーの一人として心から感謝しています。

お知らせコーナー

I：里親研修報告 子ども主導のお遊びを1日5分しよう！

平成 21 年12月6日(土)10 時～16時、中野サンプラザでヘネシー先生の「愛着」講座を行いました。

「愛着の絆を深めるために：子どもと波長を合わせる方法」と題して、14時30分まで講演をしていただきました。最初に脳について学習しました。次にヴァン・デ・コーク博士の新しい診断名として提案されている「発育途上のトラウマ障害」について、そして、博士のトラウマセンターで行われている7つの治療について学びました。里親家庭では子どもを「治す」ことは出来ないが、子どもが癒される「家庭環境」を作ることが出来ます。里親の感情の管理をし、子どもと波長を合わせるために、子どもは本当は何を言いたいのか考えて、言葉に出して行ってあげよう、悪い行動

に焦点をおかずに、そのもととなっている発育途上のトラウマを知る、反抗を里親に向けられたものとして反応をしないこと。そして子ども主導のお遊びを1日5分しようと宿題を出されました。

後半の事例研究は、愛着に問題のある子どもを委託された里親の事例の読み合わせをし、6～7人でグループになり先生より出された4つの質問を話し合い発表しました。今、必要としていることは、里親宅で安全、安心して生活し、専門の治療を受けること、サポートをしてくれる支援者が必要なことなどを学びました。

今回はキャンセル待ちをお願いした方もいました。2010年は、10月末日にヘネシー先生の宿泊研修を予定しておりますので、ぜひご参加ください。
(研修担当 後藤多美子)



編集後記：☆今回は野辺陽子さん（事務局）に通信の編集を手伝っていただきました（^^）。子どものことを考えるならば、里親制度のことだけでなく、多くの分野に目をむける必要があるなど、2日間の大会を通して改めて感じました（和泉）。☆このような大会は単発で終わってはならないと感じています。IFCO大会と同じように、2年に1度でも実施していけたら、日本の里親制度もより充実したものになるのではないのでしょうか？(坂本)